東京外大 東南アジア学 Southeast Asian Studies TUFS No. 26, 84-96, 2020

クメール語の情報構造

Information Structure in Khmer

上田　広美

Hiromi Ueda

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

要旨

本稿では、クメール語の句の位置と情報構造の相関について、「東南アジア諸言語情報構造調査票」（峰岸 2019）に基づいて、タイ語の調査結果と対照しつつ調査を行った。その結果、タイ語と異なる部分として、やりもらい文の間接目的語は主題化できないこと、一項構文で述語が先行できること、引用節を含む選択疑問文の疑問助詞は引用節に後置できること、やりもらい文の主語を問う質問の返答には述語をつけないこと、数量詞句の名詞句からの遊離に制限があることを述べた。

This article provides Khmer data collected using the questionnaire “information structure on the languages in the South east Asia” (Minegishi 2019). This article describes five differences between Khmer and Thai data as follows. 1) Khmer sentences including the verb “ʔaoj” (give) cannot topicalize their indirect objects; 2) both subject predicate order (subject + verb) and predicate subject order (verb + subject) occur in Khmer one-place predicate sentences; 3) Khmer questions with question words “who” including the verb “ʔaoj” (give) include an answer without a predicate; 4) the Khmer question particle “tèe” follows quotational clauses in yes/no questions; and 5) Khmer quantifier phrases cannot always follow verbs.

キーワード：クメール語，情報構造，タイ語，焦点，主題

Keywords: Khmer, information structure, Thai, focus, topic

者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
ons.org/licenses/by/4.0/deed.ja

はじめに

本稿では、タイ語の情報構造について調査した「東南アジア諸言語情報構造調査票」（峰岸 2019）に基づき、句の位置と情報構造の相関について、クメール語の調査を行う[1]。必要に応じてタイ語の調査結果と対照する。また、クメール語の書記資料から追加の用例[2]も利用する[3]。

I. 基本語順

本章では、クメール語の基本語順を紹介する。基本語順は、タイ語と同じく「主語＋述語＋直接目的語（＋間接目的語）」、「被修飾語＋修飾語」、「付属語＋自立語」である。しかし、タイ語と異なり、一項述語に２種類の語順が現れる場合がある。また、かつては接辞[4]による造語法が用いられていた[5]ことから、動詞によっては/tlɛ̀ək/＜落ちる＞と/tòmlɛ̀ək/＜落とす＞[6]のような対が存在する。主題、旧情報は文頭に位置し、新情報、焦点は文末に近い位置に現れる。基本語順の要素のうち、主語や目的語については、文脈上必要がない場合、文中に現れないが、述語[7]については、主語を問う疑問詞疑問文の返答以外では省略されない。

1. 一項あるいは二項を含む基本構文

基本語順は、「主語＋述語＋目的語」であるが、例（1）に示すように、一項述語に２種類の語順が現れる場合がある。例（1a-b）は、例えば、雨が降り出したのに気が付いた状況でいずれも用いることができる[8]。例（18）で後述するように動詞/tlɛ̀ək/＜落ちる＞は、「（無意識に）落とす」という意味でも用いられる。「（故意に）落とす」場合には、動詞/tòmlɛ̀ək/＜落とす＞を用いる。

(1a) pliəŋ　tlɛ̀ək
　　雨　落ちる
　　「雨が降る。」

(1b) tlɛ̀ək　pliəŋ
　　落ちる　雨
　　「雨が降る。」

例（2）は、「主語＋述語＋目的語」という二項述語の例である。

(2)　kɲom　ʔaoj　siəvphàv

1 SG　与える　本

「私が/は本をあげる。」

例（16）で後述するように、動作の行われる時間を表す副詞句は、文中で複数の場所に現れる可能性がある。しかし、述語（例 2 では/ʔaoj/＜与える＞）とその直接目的語（例 2 では/siəvphàv/＜本＞）の間に、このような副詞句が介在することはない。以下に例（3）を示す。時間を表す副詞句/msəl-məɲ/＜昨日＞は、例（3a, 3b）のように文頭や目的語の後ろに置くことはできるが、例（3c）のように述語とその直接目的語の間に置くことはできない。時間を表す副詞句は、例（3a）のように文頭に現れ主題となることが多く、（3b）のように目的語の後ろにある場合には、その動作を行った時間を尋ねられた返答文のように、その時間が新情報となっている。

(3a)　msəl-məɲ　kɲom　ʔaoj　siəvphàv

昨日　1SG　与える　本

「昨日、私が/は本をあげた。」

(3b)　kɲom　ʔaoj　siəvphàv msəl-məɲ

1SG　与える　本　昨日

「昨日、私が/は本をあげた。」

(3c)*　kɲom　ʔaoj　msəl-məɲ　siəvphàv

1SG　与える　昨日　本

2.　やりもらい文

「主語（与える人物）＋述語＋直接目的語（与えられる物）（＋/tàv/＜行く＞）＋間接目的語（与えられる人物）」の語順となる。

(4)　kɲom　ʔaoj　siəvphàv　tàv　nèərii

1SG　与える　本　行く　PSN

「私が/はニアリーに本をあげた。」

クメール語の動詞で、直接目的語と間接目的語を連続できるものは、/ʔaoj/＜与える＞、/bɔŋriən/＜教える＞、/kcəj/＜借りる＞などごく少数である。しかし、これらの動詞であっても、例（4）に示すように、間接目的語の前に方向動詞/tàv/＜行く＞[9]を介在さ

せる例が好まれる[10]。その理由としては、連続する２つの名詞（例 4 では/siəvphàv/＜本＞と/nèərii/＜ニアリー＞）が、同じ動詞/ʔaoj/＜与える＞の直接目的語と間接目的語ではなく、「ニアリーの本を（誰かに）あげた」という所有関係にあるのだと誤って解釈されるのを防ぐためだと考えられる。

3. 動詞連続構文

動詞は、形式的な手掛かりを示すことなく連続できる。例（5）に示すように、第一の動詞/baŋ/＜撃つ＞が随意な動作を表し、第二の動詞/slap/＜死ぬ＞が不随意な動作や状態を表す場合、第二の動詞は結果を表す。

(5) nèərii baŋ soophaat slap
PSN 撃つ PSN 死ぬ
「ニアリーがソパートを撃ち殺した。」

II. 主題

主題は文頭に置かれる。文脈中で既出の情報は主題となりやすい。また、時間を表す語句も主題になりやすい。タイ語と異なる点は、やりもらい文の間接目的語が主題化されないことである。

疑問詞は、主題化される場合もあるが、場所を問う疑問詞は主題化されないなど制限がある。また、２つのものを対比する場合であっても、主題化されるとは限らない。

1. 一項 あるいは二項述語文

主題は文頭に置かれる。例（6）のように既に文頭にある主語を別の文の主語と対比させて主題とする場合には、例 (7) のように/rii-ʔae/＜一方＞や、例 (8) のように/cɔmnaek/＜～の方は＞といった語句が前置されることもある。

(6) nèərii mɔ̀ɔk
PSN 来る
「ニアリーが/は来た。」

(7) rii-ʔae tònlèe-mèe-kɔ̀ŋ-kraom tònlèe-saap nɯŋ tònlèe-baasak
方 PLN PLN と PLN
nə̀v bɔntɔɔ laəŋ
まだ 続く 上がる
「一方、メコン川下流、サープ川、バサック川はまだ増水を続けている。」
（KHO）

(8) cɔmnaek rɔ̀t-jɔ̀n vɯŋ baan baək rɔ̀t kèc kluon bat
一方 自動車 戻る 得る 運転する 走る 逃げる 自身 消える
「一方、自動車の方は走って逃げ去った。」（KHO）

例（9a）の述語/ɲam/＜食べる＞の直接目的語である/nòm nuh/＜あの菓子＞は、例（9b）では、主題化され文頭に置かれている。

(9a) nèərii ɲam nòm nuh haəj
PSN 食べる 菓子 あの PRF
「ニアリーがあの菓子を食べちゃった。」

(9b) nòm nuh nèərii ɲam haəj
菓子 あの PSN 食べる PRF
「あの菓子はニアリーが食べちゃった。」

また、例（10）のような分裂文も可能である。

(10) nèərii rɯɯ dael mɔ̀ɔk
PSN Q REL 来る
「ニアリーなのか、来たのは？」

2. やりもらい文

タイ語と異なる点として、クメール語のやりもらい文の間接目的語は主題になることができない。直接目的語は主題として文頭に現れる。以下に例（11）を示す。

(11) siəvphə̀v kɲom ʔaoj tə̀v nèərii
本 1SG 与える 行く PSN
「本は、私がニアリーにあげた。」

やりもらい文の間接目的語が文頭に位置する語順では、例（12a）の文頭の/nèərii/は、主題ではなく、「ニアリー、私が（あなたに）本をあげるよ」という意味であり、ニア

リーに対する呼びかけと解釈される。例（12b）でも、/nèərii/と/boonaa/はいずれも主題とは解釈されず、「ニアリーは何を（Xさんに）あげるの？ボナーは何をあげるの？」という/ʔaoj/＜与える＞という動作の主語であると解釈される。

(12a) nèərii, kŋom ʔaoj siəvphèv
PSN 1SG 与える 本
*「ニアリーには私が本をあげた。」
「ニアリー、私が本をあげるよ」

(12b) nèərii, ʔaoj ʔəj boonaa, ʔaoj ʔəj
PSN 与える 何； PSN 与える 何
*「ニアリーには、何をあげて、ボナーには何を？」
「ニアリーは何をあげるの？ボナーは何をあげるの？」

3. 動詞連続構文

タイ語の調査票の例文と同じ意味を表すクメール語文は、可能を表す動詞/baan/を用いるのではなく、例（13）に示すように「何（の料理）を作ることを知っているのか」という表現を用いる。/ʔəvəj/＜何＞の位置を述語動詞/tvəə/＜作る＞の直後から移動させることはできない。

(13) cɛh tvəə ʔəvəj
知る 作る 何
「何は作れるの？」

一方で、クメール語でもタイ語と同じ構文をとる、可能を表す動詞/baan/を用いた動詞連続では、例（14）のように、文中での直接目的語の位置が２通り存在する。しかし、これは、/ʔəvəj/＜何＞が、連続する２つの動詞/tvəə/＜作る＞と/baan/＜得る＞のいずれの目的語であるかという語順の違いによるもので、２つの文の意味は異なる。例（14a）は、「何を作ることができるのか」という意味、もしくは「何を作ることができようか」という反語であり、例（14b）は、「作ってみたら何の料理ができたのか」という結果を表す文となる。

(14a) tvəə ʔəj baan
作る 何 得る
「何を作ることができるのか/何を作ることができようか？」

(14b) tvàə baan mhoop ʔəj klah
作る 得る 料理 何 PL
「何の料理を作ってあるの？」

4. 副詞句の位置による表現

時を表す副詞句については、文頭に位置する例（3）を挙げたが、次の例（15）に示すように、場所を尋ねる疑問詞は主題になることができない。例(15c)は、「どこであれニアリーがいるところでは、（何かが起きる）」という意味の文であれば可能である。

(15a) taə nèərii nə̀v kɔnlaeŋ-naa
Q PSN いる どこ
「ニアリーはどこにいるのか？」

(15b) kɔət nə̀v pnòm-pèŋ
3SG いる PLN
「彼女はプノンペンにいる。」

(15c) kɔnlaeŋ-naa nèərii nə̀v
どこ PSN いる
*「ニアリーはどこにいるのか？」
「ニアリーがいるところはどこであれ、」

前述の例（3）で示した様に、時を表す副詞句は、動詞とその目的語の間に位置することはできない。目的語の後ろ、もしくは、文頭に位置する。文頭にある場合には、時の経過を表す。例（16）に示すように、時を尋ねる疑問詞は主題となることもできる。主題となった場合には、「いつになったら」という時の経過を表す[11]。例（16b, 16d）の返答文の主語/kɔət/＜彼女＞は、口語では省略されることが多い。

(16a) nèərii mɔ̀ɔk pèel-naa
PSN 来る いつ
「ニアリーはいつ来るのか？」

(16b) （kɔət） mɔ̀ɔk sʔaek
3SG 来る 明日
「明日来る。」

(16c) pèel-naa nèərii mɔ̀ɔk
いつ PSN 来る
「いつになったらニアリーは来るのか？」

(16d) sʔaek (kɔət) mɔ̀ɔk
明日 3SG 来る
「明日来る」

III. 焦点

本章では、クメール語の文末に位置する文の要素について述べる。タイ語と異なる点は以下の点である。1章で述べた通り、クメール語の一項構文は述語が先行することがある。次に、やりもらい文の直接目的語は文末に移動できない。さらに、主語を問う質問に対する答えには述語がない方が自然である。最後に、選択疑問文の疑問助詞は引用節の後ろに置くことができる。一方で、数量詞句の名詞句からの遊離には制限がある。

1. 一項述語文

例（17b）に示すように、タイ語と異なり、クメール語では、一項構文で述語が先行できる[12]。例（17a, 17b）は、部屋の外など見えないところで何かが落ちた音がした時に尋ねる文としていずれも使うことができる。本稿の調査では、（17a）と（17b）の２種類の語順による意味の差異は感じられないという判断を得た。

(17a) sʔəj nɯŋ tlɛ̀ək
何 それ 落ちる
「何が落ちたの？」

(17b) tlɛ̀ək ʔəj nɯŋ
落ちる 何 それ
「何が落ちたの？／何を落としたの？」

例（17）の返答としては、例（18a, 18b）のどちらも可能である。（18b）の動詞/tlɛ̀ək/は、過失で落とした場合にも用いることができる。例（19）も例（18b）と同様に述語が先行する例である。本稿で収集した例文をみると、例（19）のように、原因となる事象（鞭にあたったこと）が文中に現れており、その後に続く結果（皿を落としたこと）

を表現する文で、述語が先行する文が現れる頻度が高いと考えられる[13]。

(18a) caan　tlɛ̀ək
皿　落ちる
「お皿が落ちた。」

(18b) tlɛ̀ək　caan[14]
落ちる　皿
「お皿が落ちた。／お皿を（過失で）落とした。」

(19) nɛ̀ək[15]　còmŋɯɯ　klah　trəv　ròmpɔət　tlɛ̀ək　caan　sɔmlɔɔ
人　病気　PL　当たる　鞭　落ちる　皿　スープ
təv　dəj
行く　地面
「病人の中には鞭にあたってお椀を地面に落とした人もいた。」　(NRK)

2.　やりもらい文

クメール語の文は、質問に対する返答で述語を繰り返すのが基本である。しかし、例（20）のように、主語の部分を問う質問に対する返答としては、主語のみで答える点も、タイ語と異なる点である。また、例（21）に示すように、やりもらい文で、直接目的語を間接目的語の後ろにおくことはできない。

(20a) nɛ̀ək-naa ʔaoj　siəvphàv　təv　nèərii
誰　与える　本　行く　PSN
「誰が本をニアリーにあげたか？」

(20b) kŋom
1SG
「私だ。」

(21a) nɛ̀ək　ʔaoj　ʔəj　təv　nèərii
2SG　与える　何　行く　PSN
「君はニアリーに何をあげたのか？」

(21b)* nɛ̀ək　ʔaoj　nèərii　ʔəj
君　与える　PSN　何

3.　選択疑問の疑問助詞の後置

クメール語の選択疑問では、文末に疑問助詞/tèe/を置く[16]。例（22-23）のような引用節を含む選択疑問文では、タイ語と異なり、/tèe/は引用節[17]の後に置くことができる。

(22a) nɛ̀ək　dəŋ　tèe　[thaa　boonaa　mɔ̀ɔk]
2SG　知っている　PTCL　QUOT　PSN　来る
「君はボナーが来たのを知っているか？」

(22b) nɛ̀ək　dəŋ　[thaa　boonaa　mɔ̀ɔk]　tèe
2SG　知っている　QUOT　PSN　来る　PTCL
「君はボナーが来たのを知っているか？」

(23a) nɛ̀ək　dəŋ　tèe　[thaa　boonaa　nəv　kɔnlaeŋ-naa]
2SG　知っている　PTCL　QUOT　PSN　いる　どこ
「君はボナーがどこにいるかを知っているか？」

(23b) nɛ̀ək　dəŋ　[thaa　boonaa　nəv　kɔnlaeŋ-naa]　tèe
2SG　知っている　QUOT　PSN　いる　どこ　PTCL
「君はボナーがどこにいるかを知っているか？」

4.　数量詞句遊離

例（24b）に示すように、数量詞句は修飾関係にある名詞句から遊離できる。しかし、タイ語と異なり、クメール語では、例（25b）に示すように、数量詞句を遊離できない場合もある。

(24a) msəl-məɲ　koon-səh　bəj　nɛ̀ək　nuh　mɔ̀ɔk
昨日　学生　3　CLF　その　来る
「昨日、その３人の学生が来た。」

(24b) msəl-məɲ　koon-səh　mɔ̀ɔk　bəj　nɛ̀ək
昨日　学生　来る　3　CLF
「昨日学生が３人来た。」

(25a) kɲom　tvə̀ə　mhoop　capon　ʔaoj[18]　səh　bəj　nɛ̀ək　nuh　ɲam
1SG　作る　料理　日本　与える　学生　3　CLF　その　食べる
「私はその３人の学生に日本料理を用意した。」

(25b) *kɲom tvàə mhoop capon ʔaoj səh ɲam bəj nɛ̀ək
1SG 作る 料理 日本 与える 学生 食べる 3 CLF
*「私は学生のうち、３人に日本料理を用意した。」

数量詞句は、被修飾語に後置されるため、修飾関係によって、文中での位置が異なる。人数を表す数量詞句は、例（26）では主語/kèe/＜彼ら＞を修飾しており、例（27）では、述語/daə trɔɔsɔɔŋ/＜揃って歩く＞を修飾している。

(26) kèe pii nɛ̀ək nih sot-tae ...
3 PL 2 CLF これ ～だけ
「彼ら２人はどちらも（私とソムオンより力が強かった）。」 (NRK)

(27) kèe nɔəm knèə daə trɔɔsɔɔŋ bəj buon nɛ̀ək
3PL 連れる 互いに 歩く 揃う 3 4 CLF
mɔ̀ɔk ʔaət jèəŋ
来る 見る 1PL
「彼らは私たちを見に３、４人でぞろぞろ歩いてきた。」 (NRK)

IV. おわりに

今回のクメール語調査の結果、調査票（峰岸 2019）のタイ語の調査結果と異なる部分は、以下の点である。

・やりもらい文の間接目的語は主題化できない。
・一項構文で述語が先行できる。
・やりもらい文の主語を問う質問の返答には、述語をつけない。
・選択疑問文の文末の疑問助詞は、引用節の後に置くことができる。
・数量詞句の名詞句からの遊離には制限がある。

上記の点は、両義性を避けるため、もしくは、述語の直後に直接目的語を置くというクメール語の基本語順を崩さないためという理由が関係していると考えられる。

本稿では、調査票のタイ語の例文と対照しながらクメール語の特徴について調べた。今後は、本稿で挙げたタイ語との相違点についてさらに調査をするとともに、先行研究中で挙げられた、焦点を示すコピュラ/kɯɯ/を用いた文型[19]や、現象文との関係についても考察したい。

注

[1] 本研究は JSPS 科研費 JP17H02331 の助成を受けたものである。クメール語の作例の判断はバン・ソバタナ先生とカエプ・ソクンティアロアト先生（王立プノンペン大学）の判断に従った。タイ語との対照については、ブッサバー・バンチョンマニー先生（国立カセサート大学）の助言を得た。また、本稿は、「言語の類型的特徴をとらえる対照研究会」第 13 回オンライン発表会（2020 年 8 月 1 日）での発表を基にしている。コンサルタントの先生方のご助言、研究会参加者によるコメント、及び本稿の査読者によるご助言に深く感謝する。

[2] 出典は、以下の略号で各例文末尾に記す。NRK : Om, Sambatti (1999) Muoj ban huksip pram thnai knun narok, Om, Sambatti.KHO : Kohsantepheap https://kohsantepheapdaily.com.kh/article/101343.html（最終閲覧日 2020 年 11 月 18 日）https://kohsantepheapdaily.com.kh/article/703144.html（最終閲覧日 2020 年 11 月 18 日）

[3] 本稿の表記は音韻表記で、坂本（1988）に従う。複合語として逐語訳をつけたものは、-を付加した。略語は以下の通り. 1 人称 1, 助数詞 CLF, 否定 NEG, 文末詞 PTCL, 完了 PRF, 人名 PSN, 複数 PL, 地名 PLN, 疑問 Q, 引用 QUOT, 関係代名詞 REL, 2 人称 2, 単数 SG, 3 人称 3

[4] 前接辞と接中辞がある。

[5] 現在では、造語能力はない。

[6] /òm/が接中辞である。

[7] 動詞または形容詞。

[8] 本稿の調査のコンサルタントによると、無生物に関しては一項構文で述語が先行できるように思えるが、天候の表現であっても「雨が降る」を「風が吹く」に置き換えると述語は先行できなくなる、という意見であった。

[9] 話者に向かう動作であれば、/mɔ̀ɔk/＜来る＞を用いる。

[10] /bɔŋriən/＜教える＞の場合には、/dɔl/＜至る＞を、/kcəj/＜借りる＞の場合には前置詞/pii/＜から＞を用いる。

[11] 上田（2011）では、「時を表す語句」の文中での位置を調査した。その結果、他の時間と対比してある時間にどのような出来事が起きるのかという文脈で、主題化されやすいこと、一方、ある出来事が起きるのが「ほかならぬその時間」であるという文脈では文末に置かれることを述べた。

[12] 坂本（2003）では、ＶＳ語順が可能である自動詞について、「変化を意味する自動詞に限られる。状態を意味する自動詞もあらわれることができるが、ＶＳ語順では変化性の事態を指示する」と述べている。また、主語名詞句の特徴として、「自動詞が意味する事態を成立させる自律的な力がない。事態が成立するかどうかは外的な状況によって決まる」としている。

[13] 例（19）では、落としたもの（皿）の後に「地面に」という「落ちた場所」が位置しているが、この「地面に」という語句は、文中で他の位置に置くことはできない。このような場合に、「落ちた場所」に焦点があたっているのかどうかは今後考察したい。

[14] /tlɛ̀ək/の後に続く名詞句としては、/tlɛ̀ək tɯk/＜水に落ちた＞のように、「落ちた場所」を表す語句も現れる。

[15] /nɛ̀ək/は同音異綴語であり、第一の綴りでは、例（19）のように普通名詞の「人（ひと）」、もしくは例（21-23）のように代名詞の 2 人称単数を表す。また、後ろに/naa/＜どれ＞を伴い「どの人＝誰（か）」という疑問詞、不定詞としても用いる。第二の綴りでは、例（24-27）のように、助数詞の「人（にん）」である。

[16] /tèe/以外に疑問助詞/rɯɯ/や/rɯɯ tèe/を用いることもある。それぞれの疑問助詞によって、文体差や、確認の意味を含むかといったニュアンスの違いがあるが、文中での

位置が異なることはないため、本稿では/tèe/の例のみを示した。
[17] 引用節に[ ]を付す。
[18] /ʔaoj/はこの例文では使役表現を表す。
[19] Haiman (2011:246-247) Haiman (2019:366)

参考文献

上田広美. 2011. 「クメール語の時を表す語句の位置」,『コーパスに基づく言語学教育研究報告 7　フィールド調査、言語コーパス、言語情報学』III, 東京外国語大学, 245-258.

坂本文子. 2003. 「クメール語の自動詞文の語順」,『アジア・アフリカ文法研究』32, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 69-79.

坂本恭章. 1988.「クメール語」,『言語学大辞典第 1 巻世界言語編（上)』, 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編, 三省堂, 1479-1505.

峰岸真琴. 2019 「タイ語の情報構造に関わる諸表現」,『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50, 189-204.

Haiman, John. 2011. *Cambodian Khmer*. John Benjamins.

Haiman, John. 2019. “Khmer”, *The Mainland Southeast Asia Linguistic Area,* Edited by: Alice Vittrant and Justin Watkins, De Gruyter Mouton, 320-383.